令和元年度　学校自己評価の中間評価

重点目標	具体的取組	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	中間評価等	備考
1 ＩＣＴの効果的な活用や主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に努め、確かな学力の育成を図り、進路実現につなげる。	① 研究授業、相互参観授業を通して授業改善を図り、探究的な学習活動や質の高いグループ活動などを取り入れた授業を実施する。	生徒による授業評価アンケートでの肯定的評価は７７％であった。ＩＣＴを活用しやすい環境の中で、教師・生徒ともに発表や学びあいといった授業改善が進んでいる。	【満足度指標】全ての教員がＩＣＴを活用した授業を実践し、研究授業や相互参観授業に取り組み、肯定的評価をさらに向上させたい。	ＩＣＴの活用など授業に工夫が見られるとする肯定的評価が Ａ　８０％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　６５％以上 Ｄ　６５％未満	**生徒による前期授業評価アンケートで肯定的評価は80％ →評価【Ａ】**	**前年度は71％。** 今年度は「効果的なICTの活用」に焦点を絞った調査をしている。今後も思考力・判断力・表現力を高める授業を目指し、さらに改善充実を図りたい。 Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
		生徒による授業評価アンケートでの肯定的評価は８０％であった。主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善により、生徒が達成感を味わえるように授業改善を行っている。	【努力指標】学力がついてきているという肯定的評価が高まり、成績に反映するように主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に取り組む。	授業を通じて学力がついてきているという肯定的評価が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７５％以上 Ｄ　７５％未満 ※3年連続で80％以上の場合、目標達成とする。	**生徒による前期授業評価アンケートで肯定的評価は77％ →評価【Ｃ】**	**前年度は77％。** 学力向上のために学習意欲の喚起や予習復習を要する授業などに取り組んでいきたい。この項目は生徒の授業に対する満足度を示すもので、評価Ｂ以上に取り組みたい。 Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
	② 「総合的な探究の時間（西高SDGsプロジェクト）」の活動を通して、主体的・探究的・対話的に学び活動する態度を養う。	生徒によるアンケート結果での肯定的評価は９６％と予想以上に高い評価であったが、個々の活動を見ると自己評価が甘くなっている生徒もいたと思われる。数字に実態が近づくよう更なる改善を加える予定。	【満足度指標】プロジェクトに対して年間を通じて主体的・探究的・協働的に取り組んだ、とする肯定的評価を維持する。	生徒によるアンケートで「主体的・探究的・対話的に活動に取り組んだ」とする肯定的評価が Ａ　９５％以上 Ｂ　９０％以上 Ｃ　８５％以上 Ｄ　８５％未満	**年度末に評価**	年度末の振り返りの時間に、生徒によるアンケートを実施する。 Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
	③ 家庭学習時間量調査を実施して現状を把握・分析し、指導することで進路実現にむけた学習時間の確保を促す。	生徒による学習時間量調査の結果によると、目標達成生徒の割合は２３％であった。	【成果指標】目標とする家庭学習時間を「学年＋１時間」に設定し、達成する生徒の割合を５０％以上にする。	家庭学習時間が「学年＋１時間」に達している生徒の割合が Ａ　５０％以上 Ｂ　４０％以上 Ｃ　３０％以上 Ｄ　３０％未満	**１学期の家庭学習時間調査では →評価 １年【Ｄ】17% ２年【Ｄ】 2% ３年【Ｄ】18% 全ての学年で学習時間を増やす手立てを検討する。**	**前年度は1年(25%) 2年(8%) 3年(9%)** 安易に課題を課して家庭学習時間を増やすのでなく、家庭学習を必要とする授業の実践により目標を達成していく。 Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
	④ 校外模試のデータを教科と学年が連携をとって分析し方策を検討することで、学力向上に結び付ける	昨年度の１月校外模試３教科型偏差値が５２以上の生徒は、１年生８クラスで９１名、２年生９クラスで１０６名であった。	【成果指標】１・２年１月の校外模試で３教科型偏差値が、５２以上の生徒数が、１２０名以上を目指す。	１月の校外模試３教科型偏差値５２以上が Ａ　１２０名以上 Ｂ　１００名以上 Ｃ　８０名以上 Ｄ　８０名未満 ※１・２年別に達成度を判断する	**当該模試の結果で評価**	Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
		現３年生は、２年次１月記述模試５教科偏差値５０以上が９クラスで１２６名、２月マーク模試総合偏差値５２以上がレギュラー７クラスで４１名であった。	【成果指標】３年校外記述模試において、偏差値５０以上及びマーク模試偏差値５２以上は１２０名以上を目指す。	１０月校外記述模試偏差値５０以上が Ａ　１００名以上 Ｂ　８０名以上 Ｃ　６０名以上 Ｄ　６０名未満 １１月マーク模試総合偏差値５２以上が Ａ　１００名以上 Ｂ　８０名以上 Ｃ　６０名以上 Ｄ　６０名未満		
	⑤ 進路学習を充実させることで、高い進路目標を持たせ、最後まで目標実現のため努力を継続させる指導を行う。	国公立大学合格者数は６２名。 金沢大学、富山大学合わせた合格者は、１５名（金沢大４名、富山大１１名）。	【成果指標】 ① 国公立大学合格者数１００名以上を目指す。 ②金沢大学、富山大学合わせた合格者３０名以上を目指す。	①国公立大学合格者数（過年度卒含む）が ②金沢大学、富山大学合わせた合格者が Ａ　①１００名以上かつ②３０名以上 Ｂ　①７０名以上または②２５名以上 Ｃ　①５０名以上または②２０名以上 Ｄ　①５０名未満かつ②２０名未満	**年度末の実績で評価**	Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
2 組織的な生徒指導を通して、規範意識を高め、将来の主権者としての自覚を促し、自立した社会人たる判断力・行動力を養う。	① 朝の挨拶運動において生徒会と協力して活性化を図る。自ら発する伝わる挨拶を実践し、社会人として必要なコミュニケーション能力を培う。	挨拶は、されたら返す程度で自ら発する生徒は半数に満たない。また、声に出して伝えることが苦手な生徒が少なくないために、会釈のみの挨拶をしている場面が散見される。	【成果指標】自ら相手に対し、挨拶を発することができたかどうか？生徒アンケートから評価する。	生徒によるアンケートから、いろんな人に自ら発して伝わる挨拶ができたが、 Ａ　９０％　以上 Ｂ　８０％　以上 Ｃ　７０％　以上 Ｄ　７０％　未満	**生徒による前期学校評価アンケートで肯定的評価は80％ →評価【Ｂ】**	特に運動部に所属している生徒は相手に伝わる挨拶を実践している。生徒会執行部主催の「愛拶運動」も継続し、さらに高評価を目指したい。 Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
	② 登校指導等において、自転車乗車マナーの向上を目指し、交通ルール遵守の精神を忘れず、安全に配慮できる判断力と注意力を身につけさせる。	交通違反件数は減少してきているが、約９００名の生徒が自転車通学をしており、その中には、自分勝手な運転をして交通事故に遭ったり、スマホやイヤホン等のながら運転はいまだ目にする光景である。	【成果指標】県教委からの自転車乗車違反指導件数から評価する。	自転車乗車違反件数が、年度末累計で Ａ　３０件　未満 Ｂ　３０件　以上 Ｃ　４０件　以上 Ｄ　５０件　以上	**今年度９月末では11件 （内訳） 二人乗り２ 携帯1 並進１ イヤホン４ その他３**	**前年度９月末では12件** （内訳）二人乗り4、携帯4 傘差し2、無灯火1 並進1 Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
	③ いじめは決して許されない行為であることを周知し、他者の心情を配慮できる思いやりの心を醸成する。未然防止に取組とともに、居心地の良い学校づくりに努めていく。	昨年度はいじめアンケート２回で１名もいじめを訴える生徒はいなかった。しかし、生徒アンケートからはいじめへの肯定的な取組について５６％と低い数値が示された。生徒が安心して通える学校づくりへの改善がさらに必要と考える。	【成果指標】互いを尊重できる居心地の良い学校かどうか、学期末アンケートから評価する。	互いを尊重できる居心地の良い学校であるかのアンケート集計で、肯定的評価が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	**生徒による前期学校評価アンケートの肯定的評価は87％ →評価【Ｂ】**	今年度より、互いを尊重できる居心地の良い学校であるかを把握する質問に変更した。 Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。

		④	自己管理能力を高めるために、自らの健康問題にしっかりと向き合う態度を養う。	視力低下や歯科疾患を放置し医療機関を受診しない傾向が見られ、自らの健康問題の改善に真剣に取り組む意識が低い。	【成果指標】 視力と歯の受診者全員が健康問題に関心を持ち、医療機関を受診して視力の矯正や、齲歯の治療等を行うことを目指す。	視力と歯の要受診者の受診率平均が Ａ　６０％以上 Ｂ　５０％以上 Ｃ　４０％以上 Ｄ　４０％未満	**年度末の実績で評価**	Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
３	文武両道の実践のもと、部活動の更なる活性化を図り、心身の錬磨を通して、人間力を高めチャレンジ精神を培う。	①	運動部・文化部ともに活動内容の充実と挨拶などの規範意識の醸成を図りながら部員数の増加・定着に努める。	昨年度は例年に比べ退部者人数は減少したが、部活動の意義と継続する大切さを教師側がしっかりと生徒に伝え続ける姿勢が必要である。規範意識の挨拶については、しっかりできる部とそうでない部が二極化している。	【成果指標】 部活動加入率９５％以上を確保する。年２回の部活動所属調査によって評価する。	部活動加入率が Ａ　９５％以上 Ｂ　９０％以上 Ｃ　８５％以上 Ｄ　８５％未満	**５月調査 93％ →評価【Ｂ】**	**前年度は92％** （今年度の内訳）５月 運動部　55％(56％) 文化部　38％(36％) 全体　93％(92％) Ｃ、Ｄの場合、再入部指導を検討する。
		②	運動部・文化部ともに計画的かつ効率のよい練習を行い、好成績につなげる。	県高校総体総合成績については一昨年１５位から昨年度２１位へ後退した。文化部については、賞状の枚数の増加だけでは測りきれないが、より活性化につながるように指導面・環境面のさらなる整備が必要である。	【成果指標】 部活動の練習内容の充実（科学的トレーニングの導入、効率化、自主性）によって前年度以上の成果を目指す。 運動部については、県高校総体総合成績の順位によって評価する。 文化部については、各種大会・コンクールにおける年間の獲得賞状枚数によって評価する。	（運動部） 県高校総体総合成績が Ａ　１０位以内 Ｂ　２０位以内 Ｃ　３０位以内 Ｄ　３１位以下 （文化部） 各種大会・コンクールにおける年間の獲得賞状枚数が Ａ　２０枚以上 Ｂ　１５枚以上 Ｃ　１０枚以上 Ｄ　１０枚未満	**年度末の実績で評価**	**前年度** **県高校総体総合成績は、21位** **文化部表彰18枚** Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
４	ボランティア等の諸活動や情報の発信を通して、保護者、地域との連携を密にし、信頼される学校づくりを行う。	①	学校教育活動について、ホームページやメール配信、学年通信等による積極的な配信に努め、保護者や地域の方の一層の理解・協力を得る。	保護者による学校評価アンケートの結果によると、肯定的評価は７４％であった。	【満足度指標】 学校の情報提供による満足度を８０％以上にする。	学校の情報提供は十分に行われているという保護者が Ａ　８５％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７５％以上 Ｄ　７５％未満	**保護者による前期学校評価アンケートで肯定的評価は78％ →評価【Ｃ】**	**前年度は77％** 今年度はICT支援員が配置されたこともあり、改善充実を図りたい。 Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
				昨年度、ＰＴＡ総会・教育ウィーク時の保護者の来校者数はのべ５００名であった。	【努力指標】 ＰＴＡ総会、教育ウィーク時の保護者の来校者数を増やす。また、進路説明会などの来校者数も増やしていきたい。	ＰＴＡ総会、教育ウィーク、進路説明会等での保護者の来校のべ人数 Ａ　１０００名以上 Ｂ　７００名以上 Ｃ　５００名以上 Ｄ　５００名未満	**１０月末まででは631名 →評価【Ｃ】**	現時点での実績 PTA総会　226名 進路説明会 378名 保護者説明会　27名 合計　631名 Ｄの場合、評価結果を分析し方策を検討する。
		②	各分掌や各学年、各教科と連携し、生徒の読書活動を促進する。	昨年度１２月末までの図書館の貸出冊数は、生徒１人当たり１．８８冊であった。	【努力指標】 生徒の読書活動を促進する。	図書館の貸出冊数生徒１人あたり１２月末までで Ａ　４冊以上 Ｂ　３冊以上 Ｃ　２冊以上 Ｄ　２冊未満	**１２月末の実績で評価**	Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
		③	節電・節水、ゴミの分別や紙の３Ｒｓ活動を通して、環境保全活動への意識関心を高める。	環境委員会活動を通して、環境に対する生徒の意識を高めてきたが、環境保全活動に対する意識が薄い。 『いしかわ家庭版環境ＩＳＯ「省エネ・節電アクションプラン」』の実践が５８％であった。	【成果指標】 生徒のエコ活動を推進し、環境に対する意識を高める。『いしかわ家庭版環境ＩＳＯ「省エネ・節電アクションプラン」』を実践し前年度以上の回収率を目指す。	『いしかわ家庭版環境ＩＳＯ「省エネ・節電アクションプラン」』を実践し、その回収率が Ａ　６０％以上 Ｂ　５０％以上 Ｃ　４０％以上 Ｄ　４０％未満	**回収率64.2％ →評価【Ａ】**	Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し、方策を検討する。
５	「教職員の多忙化改善に向けた取組方針」を踏まえ、教職員の時間外勤務縮減に向けて勤務時間を適正に管理し、業務改善に向けた学校マネジメントを推進するために具体的な取組を行う。	①	ワークライフバランスを常に意識し、校務の効率化に向けて具体的な取組を実践する。	昨年度の職員へのアンケート結果では、肯定的評価は６２％であった。今年度も引き続き、業務の質的向上とワークライフバランスに繋がる業務改善に取り組む必要がある。	【努力指標】 具体的な取組を実践し、時間外勤務が減少した教職員の割合を増加させる。	具体的な取り組みを実践し、時間外勤務が減少した教職員の割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　６０％以上 Ｃ　４０％以上 Ｄ　４０％未満	**職員への前期アンケート結果 「ワークライフバランスを意識し、業務の効率化に取り組み、時間外勤務が減少している」の肯定的評価は59％ →評価【Ｃ】**	**前年度は47％。** 勤務時間記録表では、４月から７月までの時間外平均は、今年度　50.6時間（3039分）前年度　54.2時間（3253分）となり、前年比3.6時間（214分）の削減となった。 また、過労死ラインと言われる時間外80時間超えの延べ人数は39人（前年54人）と、大幅に減少した。 しかし、心身の不調を訴える職員が多数発生していることを踏まえ、働き方改革をさらに推進していきたい。 Ｃ、Ｄの場合、評価結果を分析し方策を検討する。